

現在の大阪市西部はその昔、大阪が難波と呼ばれていた頃は海のなかの浅瀬であり、難波江といわれた。淀川、大和川が土砂を堆積させ、海藻が打ち寄せて砂洲ができ、これが難波八十島を形成していた。ここに現在の有明海のように、干拓をして20に近い新田が作られた。これらは江戸時代から幕府により大いに奨励され、庄屋が村人と一緒に開墾したが、後には町人衆がこれに当たった。多数開発された新田のうち、泉尾新田は西大阪では九条、市岡新田について大きく、大正区では最大であった。泉尾新田は元禄11年(1702)和泉国に在住の北村六右衛門が開墾し、4年間で完成させた。まず堤防作りから始まり、かさあげし、現在の尻無川防潮水門から泉尾7丁目、北恩加島1丁目、北村1・2丁目、千島3丁目、千島バス停、泉尾東小学校、南泉尾公園に達していた。堤には櫓(はじ)の並木が植えられ、その紅葉は美しく、ハゼ釣りといまって大阪市民の行楽地として人気を集めた。

北村六右衛門は正保元年(1644)、和泉国大鳥郡つくのお尾村に生まれ、幼名を宗俊といったが、後に六右衛門と名乗り、代々これを襲名した。慈悲深く、緻密な反面、豪放で、強い意志を持ち、資産家であったため、新田開発の大事業が遂行できた。宝永4年、大地震と津波で新田は壊滅的な被害を受け、水没しながらも復旧できたのは、彼の不屈の意志によるものであった。彼は和泉国に住んでいたため、新しくできた大正区の泉尾新田には会所(事務所)が設けられ、南泉尾2丁目に建物があつた。ここで開墾、小作料管理を行わしめた。

開発者の国名(和泉)と村名(つくの尾)から1字ずつ取り、泉尾新田と命名された。現在まで泉尾地区と北村地区として地名が残されている。私が開業した時、今の北村は泉尾北村町といった。

明治34年(1901)、北村六右衛門が設立、経営していた北村銀行が株の投資事業に失敗し、預金者の取付けにあい、臨時休業に追い込まれた。そしてその後、閉鎖された。

これが「明治34年の恐慌」と呼ばれる全国的な銀行取付けの口火と



なった。

北村銀行に預金の貸し付けをしていた他の銀行は資金の回収に頭を痛めた。救いは北村家が17世紀に開墾した2万平方メートル（甲子園球場の約30倍）に及ぶ泉尾新田が所有されており、これをもとに債権回収を図ったことだ。

だが、土地を直ちに現金化することは困難であった。そこで考え出されたのが、次の方法だった。

土地を切り売りするのではなく、一括して買収する会社を設立し、その会社の株式を債権者が取得することにした。土地所有会社は、小作料や土地売却で収益をあげ配当した。

こうして北村銀行は、言い換えれば土地保有会社に生まれ変わり、清算する形となったわけだ。

そうして生まれたのが、泉尾土地株式会社で、いわば清算会社である。

現在も大阪市北区で事業を続けており、最近（1997年）千島3丁目に本社を移した。いわば古巣へ帰ってきたということだ。

当初泉尾新田の土地（泉尾土地株式会社所有）は1坪平均4～10円（明治年間）と低迷していたが、大正時代に入り25円と高騰した。これは泉尾と大阪市中心部を連絡する大正橋がかかり（大正4年）、次いで市電が開通した為で、大正7年に50円、大正11年には100円を突破し、泉尾土地株式会社は大儲けをするようになった。

株価の方も、上場後野村証券の介入もあって急上昇した。

当時土地を商品化するこの方式が大変評判となり、土地会社が雨後の筍の様に相次いで設立され、土地に対する投機が始まった。

それが土地神話として戦争をくぐり抜け、昭和の末から平成の初期にかけての投機過熱に繋がり、いわゆるバブルの破裂に至るのであるが…。

土地等不動産の処理を株式という形に証券化し、不良債権を処理した点、当時としては非常に優れたアイデアであった。

泉尾土地株式会社の社長さんである、森 敏氏（昭和9年生）は、「あんな昔に土地を商品として扱う会社を考えたことに驚きます。すばらしいアイデアマンがいたものだ」、と先人の発想に改めて感心されている。

森氏はまた、「北村先生とは長年懇意にさせていただいていましたが、

最近はすっかり御無沙汰しています。」とおっしゃる。

彼は最近私のところへ患者さんとして来られ、時々お話をする間柄であり、北村先生とは言うまでもなく、我が大正区医師会の元会長で、北村六右衛門の子孫であることは知らぬ人はない。

余談ながら昭和50年(1975)、泉尾北村という地名が地名変更政策によって消え、北恩加島という地名に改変される、という事態に至ったことがある。

しかし、北村町とい地名を残したいと考える人が多く、現在も北村に在住の赤羽三郎氏等により運動が起こり、要望書が提出された。

赤羽氏は郷土史家でもあるが、彼によると、和泉国、つくの尾村の、脇指をもつ本百姓である北村家は、又、酒造家でもあった。そして、稲作と綿作りの庄屋で、従業員(小作人)を使って手広く農業を経営した。

農作物を商品生産として資本主義的経営発展させた功績は大きく、1831年に北恩加島新田を完成させた、岡島嘉平次より百数十年も早く、先駆的である。

また、泉尾新田を開墾し、資本主義的商品生産を行い、その発展段階で経営する北村銀行が、結果的に土地資本を流動化することになったことで、その存在を理解する上でも、由緒ある地名だとしている。

こうした内容の、地名保存の要望書を、大阪市戸籍登録課課長宛に提出した。これにより、行政が動いて、新住所表示に町名として、北村の名が残されることになった。

私は、泉尾北村という地名が、ある種の歴史を秘めたものであることに感慨を持つものである。

そうした私が、大正区泉尾北村で開業してからも、既に30年が経つ。その間、土地区画整理事業で地上げもされ、おおむね平和裏に推移している。海拔0メートル地帯であったこの辺一帯が、かつて台風、高潮、戦災等で痛め付けられたことは、今では忘れ去られようとしている。大正区の地は先の阪神大震災でも、鶴町に一部に液状化現象と、皸裂がみられた以外は、たいした被害もなく、文字どうり揺るぎなき盤石に大地であるようにみえる。

しかし、一方戦後50年、我々をとりまく社会情勢は激しく変化をしようとしている。



世界にすぐれた日本の医療制度は、右肩上がりの経済成長を遂げた日本経済と共に成長してきた。それがここへ来て少子、高齢化社会への変化の荒海に、制度疲労をきたし、沈没しかかっているように見える。

私自身の30年の開業疲労と相俟って、将来に一抹の不安を感じる此頃である。

#### 参考文献

大正区史 大阪都市協会発行

朝日新聞ウィークエンド経済

赤羽三郎 要望書 (1975年)

大正区北原  
町並之図





